

【東京】元教授や部長が集まり13領域に対応、端緒は病診連携-大原國章・赤坂虎の門クリニック院長に聞く◆Vol.1

虎の門病院の外来混雑受け開院、著名医師も診療

2025年6月11日 (水)配信 m3.com地域版

医師の多くが大学病院や総合病院の元教授、元部長で構成される珍しいクリニックが東京・赤坂にある。溜池山王駅直結のオフィスビルに入居する「赤坂虎の門クリニック」（港区）は13の診療領域に対応しており、中には全国・世界で名の知られた医師も在籍する。「病診連携のモデルをつくることが目的だった」と話す大原國章院長に、2017年に開院した経緯やクリニックの特徴を聞いた。（2025年4月7日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



大原國章氏（本人提供）

——赤坂虎の門クリニックは2017年に開院しました。まずは、その経緯をお聞かせください。

虎の門病院における外来の混雑緩和が大きな目的です。虎の門病院ではピーク時の2000年、1日の外来患者数が3900人ほどもあり、以降も多くの患者さんで待合室はあふれていました。国もちょうど、大病院は重症患者さんの診療に注力し、軽症患者さんはクリニックが受け持つといった医療機関の機能分化を進めようとしていたため、当時の病院長と事務長が中心となり、「虎の門が病診連携のモデルをつくろう」と検討してきました。虎の門病院は2019年に新築移転しましたが、旧病院では建物の経年劣化が進んでおり、患者さんの満足度の点からも外来環境の改善は課題の一つだったのです。

虎の門病院の風土受け継ぎ、内科系が強み

——資料によると、開院時は大原先生をはじめ虎の門病院に勤めていた複数の医師でスタートしたとあります。

当時は皮膚科の私を含めて、内科、耳鼻咽喉科、婦人科に定年が近い部長が4人いました。ほかにも、過去に虎の門病院や虎の門系列の病院に勤めていた医師に声がかかりました。「大学病院や総合病院で教授や部長を務めてきた医師が集まるクリニック」というのは今でも珍しいのではないのでしょうか。

こうした人的特性から、診療領域が広いことも特徴です。当院は内科系を強みとする虎の門病院の風土を受け継いでおり、現在は常勤医7人と非常勤医で内科を主体に13の領域にわたって診療しています。具体的には、内科系だと

一般内科をはじめ消化器内科、呼吸器内科、循環器内科、糖尿病内科、脳神経内科、老年内科があり、皮膚科、耳鼻咽喉科、泌尿器科、産婦人科、間脳下垂体外科、骨粗しょう症外来もあるといったように多岐にわたります。

現在の1日の外来患者数は平均すると250人ほどです。周囲に大企業や各省庁が立ち並ぶ土地柄、患者層は20～80代と広く、ボリュームゾーンは40、50代です。オフィスワーカーや虎の門病院からの逆紹介患者さんもいるため、世田谷区や埼玉県、川崎市、横浜市など都心から離れたところにお住まいの方も来院されます。

人工内耳や間脳下垂体の手術で著名な医師が診療

——多くの診療領域がある中、特に専門性の高いものを挙げていただけますか。

耳鼻咽喉科の熊川孝三先生は、人工内耳の手術で全国的に名が知られています。難易度の高い臨床遺伝専門医も保有しており、難聴の原因を遺伝子レベルで診断しているほか、遺伝カウンセリングも行っています。当院の患者さんで人工内耳の手術が必要な人に対しては他院に患者さんを連れて行き、先生が自ら手術を行っています。

また、間脳下垂体外科の山田正三先生は非常勤ですが世界的に著名な医師です。下垂体腫瘍や頭蓋咽頭腫を中心に4000例以上の外科治療を行ってきた実績があり、山田先生も当院で外来しつつ、必要に応じて他院で担当患者さんの手術を行っています。

院長は日本皮膚外科学会の前理事長、学会発展に貢献

——大原先生も「日本で皮膚外科を確立した第一人者」と資料にありました。

私は1973年に東京大学医学部を卒業後、東京大学医学部附属病院や虎の門病院に勤務し、皮膚科領域における外科的な治療を専門にしてきました。中でも、皮膚がんをはじめ、あざや血管腫、瘢痕、潰瘍などの手術を多く経験しています。学会活動としては、1986年に発足した「皮膚外科勉強会」の第5回を主催し、この勉強会が1996年に「日本皮膚外科学会」に発展。私は過去に学会の理事長を務め、現在は監事を担っています。

診療的には私も熊川先生や山田先生と同様、全身麻酔が必要な患者さんは他院で手術しており、局所麻酔で済む人はクリニックでも手術を行っています。他院であれば全麻対象になるような人も当院では局麻で対応できるケースがあり、患者さんから「助かります」と喜ばれることもありますね。特に幼児の場合は昼寝の間に手術をするので、外来通院で済みます。睡眠薬を飲ませてから局麻の注射をし、しばらく待って昼寝をしてくれたら手術を始めます。あらかじめ麻酔をしてあるので、痛みなく手術ができます。眠ってから麻酔の注射をするとその痛みで目が覚めてしまうので、この順番がポイントです。

——患者の利便性でいうと、診療領域が広いのでこのクリニックのみで完結しやすいことも挙げられるのでしょうか。

それはあるでしょう。患者さんの中には複数の診療科を受診している人もあり、例えば、男性患者さんの場合は内科で血圧を診てもらい、前立腺肥大があるので泌尿器科も受診、湿疹が出たときは私の皮膚科にいらっしゃる、といった具合です。事前に複数の診療領域を予約できるため、人によっては複数の医療機関を受診する手間が省け、しかもそれが1日で済みます。患者さんにはメリットの一つに挙げられると思います。

◆大原 國章（おおはら・くにあき）氏

1973年東京大学医学部卒。東京大学医学部附属病院を経て、1984年虎の門病院皮膚科部長。2007年同院副院長。2017年赤坂虎の門クリニック皮膚科、虎の門病院特任部長、インドネシア大学連携教授。2021年赤坂虎の門クリニック理事長、院長。

